

＜クリスマス・ドロップ作戦2023＞エレファント・ウォークと太平洋上編隊飛行で幕締め *Operation Christmas Drop 2023 ends with Allied elephant walk, formation flight over the Pacific*

December 14, 2023

By Tech. Sgt. Taylor Altier
374th Airlift Wing Public Affairs

グアム・アンダーセン空軍基地発—12月9日、グアム・アンダーセン空軍基地のフライトラインで、ハーキュリーズの「エレファント」行進が行われた。6機のC-130が轟音を響かせ隊列を組んで走行するエレファント・ウォークは、多国間の即応態勢を強調しただけでなく、クリスマスドロップ作戦2023の大事な一幕を飾った。

この圧巻のエレファント・ウォークには、米空軍第36遠征空輸中隊のC-130Jスーパーハーキュリーズ3機と世界中から集まったカウンターパートが参加。カナダ空軍第436輸送中隊のC-130J、航空自衛隊第401飛行隊のC-130H、そして韓国空軍第251空輸中隊のC-130Hが、それぞれの国を代表して運用能力と連帯性を示すこの合同展示に臨んだ。



輸送機は一斉に滑走路を行進し、クリスマス・ドロップ作戦史上初となる多国間共同編隊飛行の準備を整えた。エレファント・ウォークに続いて各参加国の航空機と乗員たちは空へと飛び立ち、OCDで達成した相互運用性を誇示し、米空軍、カナダ空軍、航空自衛隊、韓国空軍の乗員たちの献身を称えた。

「早く行きたければ、ひとりで進め。遠くまで行きたければみんなで進め」という、ことわざがあるように、太平洋地域の国々が集まって訓練に臨むOCDは、参加者全員が、人類愛に基づいて活動する一つの心、一つの目標を持っているからこそ、やりがいがある」と、韓国空軍第251空輸中隊C-130H教官パイロットのパク・ソンウ少佐は述べ、「より多くの国や人々が作戦に参加できるようにOCDが発展し拡大していくことを願っている。誰もが知る通り、幸せは分かち合うことで生まれるものだ」と語った。

多国間共同編隊飛行は、膨大な総力の集大成でもあった。乗員たちは6日間にわたって、コンテナ210個の人道援助物資を58の島々に届け、180万平方海里にわたるミクロネシアの離島に住む4万2千人以上の島民を支援した。

米空軍のOCD指揮官兼パイロットのザック“バジャー”・オーバーベイ少佐は、「作戦で最初の投下を終えて帰還した時のみんなの表情が好きだ。乗員たちは、自らが島民を支援し、恩恵をもたらしているのを目の当たりにしている」

OCD23の日本の指揮官である航空自衛隊の高坂信也二佐もオーバーベイ少佐の意見に同調し、このミッションの意義深さを強調した。

「パラオ上空を飛行した時、眼下に日本の旗を振っている沢山の島民たちが見えた。私たちが待ち望んでいてくれたことを肌で感じることができ、パイロット、そして中隊長として、とても意義深いミッションだった」

この作戦は、参加国が個別かつ連携して人道援助・災害対応能力の向上を図る多国間共同訓練としても重要な役割を果たしている。

高坂二佐は、「OCD23を通じて、日米の相互運用性を向上させ、多国間の連携を強化するとともに自由で開かれたインド太平洋の実現に貢献できると信じている」と期待を語った。

今年のOCDでは、初めてカナダ軍が参加し、重要な空輸支援と、援助物資の梱包準備や航空機整備のための人員を動員した。

「島民が私たちに手を振ったり、プレゼントを受け取りに走ってくるのを見て、とてもやりがいを感じた」とカナダ空軍第436中隊パイロットのアイザック・ベイツ少佐は語った。「積み重ねてきた仕事が素晴らしい形で結実し、うまく統合できた。この経験をカナダに持ち帰り、また来年も新しい仲間と参加できることを楽しみにしている」と述べた。

卓越した国際協力を発揮し、飛行した4か国はオーストラリア空軍とフィリピン空軍の地上支援を得て一丸となり、支援を必要とする島民たちに大きな恩恵をもたらした。